Mini Report ②

インターネット句会の実際、その魅力と課題は？

ネットと結社誌は両輪 当初からホームページを開設

昨今俳句の世界でも、インターネットを活用する動きが活発に見られます。パソコンで「インターネット 俳句会」と検索すると、無数の俳句会のHP（ホームページ）がヒットし、投句をネットで受け付けているところも数多く存在します。

名古屋を中心に約500名の会員を抱える「伊吹嶺（いぶきね）」もそんな俳句結社のひとつ。元々伊吹嶺は、全国的な俳句結社「風」の愛知県支部句会報としてスタートし、1998年に「伊吹嶺」として創刊され、「風」の師系を継承してきました。

「伊吹嶺のインターネットに対する取り組みは早く、98年の結社立ち上げの時点からHPを開設していました。一般からの投句を受け付ける『HP句会』は、現在も続いていて毎月50名ほどの参加があります」と話すのは、インターネット部の部長を務める国枝さん。

主宰の栗田やすし氏が「結社誌とネットは両輪」との考えで積極的にネットの活用を後押し、HPの運営は20名ほどのスタッフがインターネット部を運営しているそうです。

（上）昨年行われたオフ句会の一コマ。毎回自然を見直す機会として環境をテーマに行き先が決められる。
（右）月刊誌として発行されている「伊吹嶺」。100ページのボリュームがあり、俳句作品だけでなく、特集や連載企画など多彩な内容

チャットルームを設けるなど ネットの欠点を補う工夫

伊吹嶺のインターネット句会で中心となるのは、会員を対象とした「いぶきネット句会」です。

「どこからでも参加でき、好きな時間に投句できるので、遠方からの参加も多いですよ」と話すのは、インターネット部副部長の矢野さん。

一方で、ネットでは相手の表情を窺ったり、直接の会話ができないので、俳句に重要な座の意識が希薄になりがちというデメリットについても認識されていました。その対処として、ML（註1）（メーリングリスト）とチャット（註2）を活用しているとのこと。

実際の活用法は、事務局が投句を取りまとめ、会員にMLで一斉配信。選句期間後、事務局が作者の名前を伏せた選句一覧を作成し再びMLで配信。毎月決まった2日間に1時間ずつチャットルームを開設し、よかった句の感想や質問などを交わすそうです。その後、名前を入れた選句一覧をMLで配信するとともに、同人で投句を添削し会員に返信するというのが1カ月のルーティーンとのこと。

毎回約30名、100句超の俳句が集まり、年に1回は直接顔を合わせる吟行も「オフ句会」と称して開催されているそうです。

若い会員の獲得は、やや思惑が外れているそうですが、会員増には役立っているとのこと。「本当はテレビ会議のような句会も持てればいいのですが」とおっしゃった言葉に、現在はネット句会の過渡期なのかもしれないという思いを抱きました。

（註1）ML…同時に複数の人へメールを配信する仕組み
（註2）チャット…パソコン上でリアルタイムに文字を入力し、複数の人たちで会話をすること

俳句結社 伊吹嶺　インターネット部長
国枝隆生（くにえだ たかお）［右］
1941年岐阜県生まれ。大学時代に俳句サークルで俳句に傾倒。1964年俳句結社「風」入会。1998年「伊吹嶺」入会、2000年「風」同人、2001年伊吹嶺同人。俳人協会会員。句集に『鈴鹿嶺』。

同　インターネット副部長
矢野孝子（やの たかこ）［左］
愛知県生まれ。PTA仲間の誘いで俳句を始める。1986年俳句結社「風」入会。1998年「伊吹嶺」入会、2002年伊吹嶺同人。俳人協会会員。句集に『草の花』。